

# 幸せな大学とは

首都大学東京管理部教務課教育支援・評価係  
磯脇 洋平

一体、誰のために仕事をしているのか——年度初めの忙しい4月、大学全体が少し落ち着いて業務に腰を据えはじめた5月、何が何だかわからないまま働いている自分に嫌気が差していた私が、通勤時に一番長く考えていた疑問である。

上司からもらった仕事を行うという面では、上司のためである。それは勤め人として当然のことで、そもそも私の担当業務は誰を幸せにできて誰を幸せにできないのか、ひいては、首都大学東京の顧客は誰なのか。業務で思わぬことが重なっていたこともあり、前職の民間企業では入社直後には明確に抱いていた仕事像を、全く描くことができていなかった。

そんな時に、FDセミナーで研究者の話聴き、SDセミナーで職員の方々と話すことで、何かしら当座の答えを導き出せればと思う一方、新入職員の皆さんは今どんなことを感じながら働いているのかを聞きたいという本音を抱えながら、会場へと向かっていた。

FDセミナーでは、80人近くの職員と教員が同じ机に隣り合って座った。大学業界ではあまりない状況なのだろう、職員同士ならば「どちらの部署ですか」といった形でお互いに知らなくても会話は徐々になされるが、職員は職員と、教員は教員と、それぞれ話すという、ごく自然な光景が存在していた。

その雰囲気を一変させたのが、本学の大学教育センター長である山下英明先生の講演の最後に用意されたワークショップ。自身の講義での授業評価アンケートの活用法を紹介した後、「授業評価アンケートの有効な使い方について、同じ机の人と考えてください」とお題が出された。勤務先は一緒でも接点が多くない職員と教員が、1つのテーマについて議論する。教員が学生の意見をどう集約しているかということ垣間見ただけでなく、フラットな状況で話し合うことの大切さを感じていた。

その最中に、「学生にとって、どういった教育がいいのか」という問題意識を、学生にわかりやすい教養教育に体现し、大学で勉強する意義を伝えたいという想いに満ちた山下先生の講演と、東北大学の羽田貴史先

生の講演で登場した「大学のよさは、学生の質と教員の質による」、「極端な話、教員がダメでも、学生がよければうまくいく」という言葉が、いつの間にか結びつき、私の疑問のヒントのようなものが見え出した。

そして、本学の学生サポートセンターの渡部みさ先生の講演での「大学は人を育てていく場である」という話と、「学生のことで見てあげてください」という強く優しい最後の言葉が、首都大学東京の顧客は誰なのかという問いに1つの答えをもたらしていた。学生だ。学生が満足できなければ、その学校は問い直されなくてはならない。さまざまな大人の事情は、学生に真摯に説明できなければならない。無論、学生に伝えられなければ、保護者や住民をはじめとする大人には伝わりにくい。頭の中に納得感が得られた。

SDセミナーでは、「魅力ある大学・高専を作り上げるために私たち職員が取り組むこと」というテーマで、グループ討議を行った。「胸を張って首都大出身だと学生が言えるように、本学のブランド力を高める」という主旨で班別発表をした際、議論の中に出てきた本音を加えた。「ブランド力を高めるには、職員同士の連携、職員と教員の連携が不可欠」であり、「そのための場を持つことが必要ではないか」と。それぞれ背景も業界経験も組織への関わり方も異なる。ただ、同じ場で仕事をしている以上、ましてや首都大学東京の顧客が学生であるならば、1人の社会人・年長者としてできること、やるべきことはあるのではないか。そのための認識を共有できたような気がした。

担当業務が誰を幸せにできて誰を幸せにできないのかという問いに、はっきりした答えは出せていない。ただ、業務の先に確かに学生がいるだろうことを想像し、そのために仕事をしよう。面接で答えたかもしれない原則論を、ささやかな実感として持ちながら、一歩ずつ働けるようにはなってきたように思う。

最後に、FD委員の先生方、関係職員の皆様に感謝を申し上げたい。